

2020年4月5日 主日礼拝説教

ヨハネによる福音書19:38～42 「イエスを埋葬した弟子たち」 高井 卿 介

今朝から「受難週」に入る。そこで金曜日の十字架刑の直後に行われたイエスのご遺体の埋葬の出来事から学びたい。

I. 埋葬の大切さ

使徒パウロはIコリント15:3～6で、彼が伝えた最も大切なこととして4項目を挙げている。①キリストが私たちの罪のために死んだこと。②葬られたこと。③三日目に復活したこと。④人々に現れたこと。これを2つにまとめると、A.死と葬り、B.復活と顕現となり、葬りは死を確認する重要な事であることが分かる。

II. 隠れキリシタン、アリマタヤのヨセフ(38節)

イエスの埋葬に大きく貢献したのが、「アリマタヤ出身のヨセフ」(38節)であった。彼は「イエスの弟子でありながら、ユダヤ人を恐れて、そのことを隠していたアリマタヤ出身のヨセフ」と言われている。即ちだから彼は「隠れキリシタン」であった。

また彼は「金持ち」(マタイ 27:57)であり、「身分の高い議員」(マルコ15:43)であり、「善良な正しい人で、同僚の決議や行動には同意しなかった」(ルカ23:50～51)ので、彼は内心イエスの十字架には賛成しなかった筈である。

そのヨセフがはっきりと自分はイエスを信ずる者であり、弟子であることを公表するきっかけとなったのが、十字架刑の下に立ってイエスの「十字架上の七言」を聞いたからと思われる。そして彼は、イエスの埋葬をしたのであった。

しかし、そのためにはユダヤを支配しているローマ総督ピラトの許可が必要であるが、それが取れたのは、彼の議員という高い地位が物を言ったと思われる。更にイエスが息を引き取ったのが午後3時であったあり、午後6時には金曜日の安息日となる。それまでに埋葬を済まさなければならないので、従って大変忙しく時間との戦いでもあった。

III. ニコデモの再登場(39～42節)

ここで孤軍奮闘するアリマタヤのヨセフに強力な助け手が現われた。それが「かつてある夜、イエスのもとに来たことのあるニコデモ」(39節)であった。⇒3章。彼もまた議員であったので顔見知りの同僚であった筈。

ニコデモは埋葬に必要な「没薬と沈香を混ぜたもの百リトラ(30Kg)ばかりを持って来た」(39節 b)。それをイエスのご遺体に塗り、亜麻布に包み墓に埋葬することが出来た。

その葬った墓はアリマタヤのヨセフの所有の墓であり(マタイ27:60)、刑場にも近く(41節 a)、「だれもまだ葬られたことのない新しい墓であった」(41b)。

エジプトのファラオは即位と同時に自分の墓を造る。誰も葬られたことのない新しい墓に入るためであった。だからイエスはファラオか「王」のように葬られたのであった。それは当然であった。イエスの十字架には「ナザレのイエス、ユダヤ人の王」(19:19)という、罪状書きが掲げられていたからである。